

# 平成28年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区名	住之江
学校名	大阪市立平林小学校
学校長名	古山 清

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育局の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科も含め、総合的に子どもの学力向上を目指しています。学校の現状や取組の参考にしていただきたいと思います。

## 1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準向上の観点から、児童の学力や学習状況を継続的に把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## 2 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語、算数）
  - ・主として「知識」に関する問題（A問題）
  - ・主として「活用」に関する問題（B問題）

- (2) 質問紙調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

## 3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全生徒
- ・平林小学校では、第6学年 50名

## 平成28年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

平均正答率は、国語・算数ともに全国平均・大阪市平均よりも低い結果となっている。加えて、無解答率は全国平均・大阪市平均よりも高い結果となっている。

国語Aでは「話すこと・聞くこと」に関しては他の領域に比べ全国平均・大阪市平均との差が小さくなっている。算数では、全国平均・大阪市平均よりも低く、算数Aにおいては、解答時間が不足したことによる無解答が多くなっている。

児童質問紙では、規範意識や仲間づくりの意識については全国平均・大阪市平均を上回っている一方で、基本的な生活習慣・家庭学習・自己解決能力に課題があり、全国平均・大阪市平均より下回る結果となっている。

## 分析から見てきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕日頃から耳や目にする漢字・ローマ字などの正答率が高い。反面あまり耳にしない言葉の漢字や促音が入ったローマ字などの正答率は低い。問題文も同じ傾向があり、日頃からなじみ深い事柄が関係することに関しては正答率が高く、なじみのない事柄について低い正答率になっている。

〔算数〕朝の学習タイムを設定し計算の反復練習を継続的に行ってきたことにより、計算問題については一定の成果が見られる。習熟度別少人数授業を多く取り入れたことで授業終了時の理解度が高いが、知識を定着させるための自宅での学習時間が少なく結果に結びつくまでには至っていない。

質問紙調査より

教職員・家庭・地域と連携し、きまりを守り自己を大切にする指導を行ってきた。学校への規範意識、社会への興味関心、社会貢献に対する意識に関しては全国平均・大阪市平均より高く意識が高く保っている。

学校内で正答率が高い児童の特徴として、（学習計画を自分で立てる・予習、復習を行っている・授業中わからないことがあればそのままにしておかず解決している・自分によいところがある。）などの項目に肯定的な回答が多い。このことから、家庭学習の習慣を定着させることが必要である。

## 今後の取組

引き続き習熟度別少人数授業を充実させるなど、基礎基本をより定着させるような取り組みを一層推進する。

毎日の反復練習で漢字・計算を定着させ、学習の習慣化をより一層図っていく。

家庭学習の習慣が定着するように保護者への啓発を図り、さらに学校からの発信と連携の強化に努めていく。

国語辞典を全児童が持ち、いつでも活用できる状況にすることで、自分自身で調べようとする力を育てる。